

実在の言葉

——願生論（十七）——

安 田 理 深

一

言葉という名言ということにつきまして、本願の言葉ですね。本願の名、それは実在の言葉と言ってもいいですが、そこにちよつと誤解を受けるね。実在というものがあつて、実在が言葉になるといふと、何か実在というものが流出するつていうような。流出するといふことはエマネイト（英 emanate）と言ふんですけど、これは古く西洋では、流出という考え方がキリスト教にあります。やっぱり現象の世界といふものは実体の流出であるといふような考え方です。それでこれは東洋、この仏教の方で申しますと、転変といふ考えがある。これは仏教の言葉ですね。パリナーマ（梵 parinama）といふ、こつういふ考え方ですね。仏教の中でこの転変といふ考えを採用するのは瑜伽の教学ですが、仏教の外の方には、数論といふ学派があります。数論の哲学といふものはこの転変といふことが基礎になる。仏教の中で転変の考え方を採用しておるのは唯識で識転変と言いますね。唯識の場合は、言葉と言つても意識の転変だといふ。つまり識を離れて言葉といふものはないと。識の転変。名言分別といふようなことを言います。ところが外道と言いますか、仏教以外の立場ではですね、流出説にしてもまた数論の転変説にしてもですね、実体が転変すると

いう考え方ですね。実体的な転変ですね。仏教の場合は無我の転変。実体というものを否定するのが仏教の立場ですね。そういうことがある。

今言った実在の言葉ということは、実体の転変というように考えると非常に誤解がある。キリスト教でも言葉ということがありますが、仏教の上において言葉というものを考える場合には、実体が実在じゃないんだと言う。実在というものはもう既にそれ自身言葉だということ。実在を誤って言葉として捉えたものが実体。実在は実体じゃない。だから実在の言葉という場合は、そういう点から考えると、言葉というのはどこまでも安立されたものという意味が大事なんです。安立せられたものと。だから昨日言いました離言ですね。離言という意味は非安立体という。実在は非安立の安立せられたものを言います。言葉というものを考える限り安立されたもの。あるいは施設せつせですね。あるいは仮設けせつ。仮に設けられたものという意味ですね。ドイツ語でゼツチエン（独 *setzen*）という意味ですね。セット（英 *set*）と言いますか、英語では。セットというような意味です。このゼツチエンされたものという、こういうことを名というようなものはですね、どうしてもその点をはつきり考えてもらわなきゃならん。実体が言葉となるなら、それは一つの実体の流出というような具合に考えるかも知らんけども、そうじゃない。実在の言葉という、実在において、実在の上に施設されたものと。実在は言葉ではない。けど実在の上において言葉は施設されたものと、こういう意味がある。そういうように考えなきゃならん。

それでこの仮というように言うのと、龍樹の空の思想は仮名けみょうですね。一切は空であるというようなことがですね、空たるものが一つの般若の教学で実在を表す言葉で、実在を空として表す。つまり実在というものは必ずしも実体じゃないという意味で空と言うわけです。空という言葉はこれは一応は否定。ただ、空という言葉は空ではないんですよ。空自体には空という言葉しかないんです。だから空という言葉はやっぱり空において施設されたもの。一つの仮名であるという意味ですね。それから世親の中でも「仮に由って」という。龍樹の『中論』には仮名というこ

とがあります。世親の『唯識論』には仮設という。存在は仮設されたものに過ぎないと。こういうような所から考えてみるとですね、みんな言葉というものが安立されたもの、施設されたものと、はつきりそういう立場に立っておるわけです。だから言葉は実在を表せないという意味にも取れる。言葉は何か軽く見る。仮設と言うとね。仮に立てたものだというようなことを言うとき軽く見る。しかし、むしろ軽いものであるという所に実は重い意味があるんだと思います。軽いものであるという所にかえて重い意味がある。仮設されたものであればこそ実在を開くんではないかと思えますね。開示すると。言葉というものは仮設されたものであればこそ、真の実在というものを開顕する。自由に開顕する。こう言うことができるんじゃないかと思えます。言葉は実在を表すことができないという意味で空と言うのかも知らんけども、しかしまた空という言葉がなければ実在を表すことができない。言葉というものは実在というものを誤解せしめるものであればこそ、また誤解を破る所のもまた言葉である。だからこの仮設ということによって、かえって実在は実在自身を成就する、建立することができると。こういう具合に僕はまあ言いたいですね。

だからこの実在というものがどこまでも言葉というものを拒否するならば、やっぱり拒否するという言葉になつてしまふと思えますね。拒否するという言葉になつてしまふ。仮設ということ、この言葉というものによつて一層、言葉を超えたものを表しておるんですね。言葉は実在じゃない。言葉は単なる仮設されたものに過ぎない。言葉は言葉となる。言葉というものが実在そのものを流出するもんじゃない。言葉というのは単にゼツチェンされたものに過ぎない。それが言葉が一層純粹に言葉となることですよ。そういうことによつてかえって、言葉を超えた実在が真に言葉を超えたものとして表現されるんだと思えますね。言葉が言葉自身の仮ということ忘れて、言葉によつてものが語られれば、ものは言葉の語られたことを実体化する。実在そのものであると。こういうように、言葉そのものが施設性というものを忘れて、それから限界を超えれば実体になるんですね。言葉が自分の限界を超えれば、実在を逆に実体化する。そうじゃなしに言葉というものは仮です。仮の実在。これはどこまでも一線がある。仮はどこまでも仮で

ある。単に実在というものが現れたものじゃない、実在の上に仮設されたものだ。言葉が言葉になれば、そうすれば実在はどこまでも離言という。言葉も言葉となることによつて実在も実在となる。言葉の誤解から実在も誤解される。混乱してくる。だから、仮はどこまでも仮であり、実はどこまでも実である。そういう意味でこそ、実在が言葉によつて表し得る。こういうことが言えるんじゃないかと思えますね。

だからこの言葉というものが、やっぱり仮なるものが大事なんです。実在は言葉ではないけど言葉を超えておるけども言葉は単なる仮なるものだけど、仮なる言葉が必要なんです。仮なる言葉によつて実在は実在自身を開示することが出来る。言葉で表されることによつて実在が消えていくんじゃないに、なくなるんじゃないに、言葉というものによつてこの仮立の言葉によつて一層仮立じゃない実在ということが表される。言葉を否定して、ただいたずらに言葉を立てたことを恐れて、そんなものは迷いだと、ないものだとこう言ってしまったら、実在というのは何も無いものだということを言う言葉になる。そうでしょ。言葉というものをこれしかないと言ったら、これしかないということも言えない。だから仮なる言葉を認める。仮なる言葉というのは、つまり仮を実とするんじゃないに、仮は仮として、仮であるという所に実を表す意味がある。仮であるという所に実なるものを表す意味をもつておる。こういう意味なんです。例えてみたら、実在というものは絶対的なもんだ、言葉というものはやっぱり絶対というもんだと。相対を拒否して絶対と言いますと、絶対という一つの相対になつてしまいますね。本当の絶対というものは相対を拒否するもんじゃない。かえつて相対を認める。相対というものをかえつて絶対というものを成就する。絶対は相対を超えておる。相対を否定すると、かえつて絶対自身が相対化してしまう。相対と絶対との混乱が起きるわけです。相対を延長してですね、相対というものを何か継ぎ足して、そしてそれが絶対であると言うなら、これは一つの越境でしょ。相対が相対自身の限界を超える。そうすれば実在も実在自身の限界を超えて流出してくる。限界を区別する。この区別ということが非常に大事なんだ。区別というものがかえつて一つであるということを表す。実在はどこまで

も実在である。言葉はどこまでも言葉である。そのように実在は言葉として表される。

二

言葉というものはどこでも考えられる。ギリシヤでも考えられたし、キリスト教でも考えられて、今日のハイデガーの哲学でも言葉というものは重要な問題となつています。言葉というものをどう考えるかね。やっぱり僕が今お話したような点が大事なんじゃないかと思えますね。こういう立場から僕は、実在の言葉はどこまでも実在の言葉であると。言葉というものは言葉を越えたものを表す言葉だ。だから表されたままがやっぱり超えている。本願の名というものは、本願は実在として言葉を越えておる。だからその本願の言葉というものは、言葉のままが言葉を越える意味を表しておる。最初に申しましたが、言葉というものは、実在と人間との対話である、こう言つて来ましたが、この本願の名というものは人間と人間との対話じゃないのですね。実在と人間との対話である。その時に、実在の名というものはですね、これは *an* というような意味です。この語るといふのはスピーク (*英 speak*) です。ドイツ語でシユプレツヒエン (*sprechen*) って言うんですけど、*an* というのは近づく、近くなる。即する意味が *an* です。だから実在が人間に近づくんですね。で、喚びかけという意味が出てくる。人間はそれに対して、*an* に対して *ent* と言つたら相応というような意味ですね。打てば響くというね。打てば響く。反応とか反動。こういう意味で打てば響く。まあ感応道交という、感応の応というようなね。感応というような意味が一番適切に表されるのが *ent* ですね。エントシユプレツヒエン (独 *entsprechen*)。だから言葉というものは実在の喚びかけである。そして一つのアンシユプレツヒエン (独 *ansprechen*) という意味をもつ。それに対して人間はその場合には *entsprechen* と言つて、応答する。こういう感応道交の関係ですね。実在と人間との、感応道交というものの意味を担つた言葉がこれが本願の名ですね。実在の言葉です。

人間が何かを語る、普通に言っておる言葉というものは、人間が何かを伝達する道具ですが、何かを語るんじゃない。これは人間が人間に語るんですね。他の人間に、Aに対してBがBの思いをね、思っておる何かを語るんですね。何かを語るといふような場合はこの一般の言葉ですけど、實在の言葉というのですね、そういう場合は何かを語るんじゃないですね。あるものを語るんじゃない。あるものをあるものたらしめておるもの自体を語る言葉ですね。あるものを語るんじゃない。色々なものを色々なものたらしめておるもの、それ自体を語る。そういうものを法性と言う。そういうものを實在と言う。思想を語るとかですね、そういうような思いを語るとかという意味じゃない。思いを超えた實在を語るんですね。それこそあらゆるものをしてあらゆるものたらしめておるもの。だから、言葉というものも、名と句、或いは文という。名句文。今、我々は本願の名というような意味を解釈しておる。本願の世界というものはね、これはまだこの講義で触れませんが、講義はまだそこまで行かんけども。あらゆるもの、色々なものにとつて、あらゆるものをしてあらゆるものたらしめておるもの自体はですね、これは言ってみればあらゆるものの故郷です。故郷や。あらゆる存在するものの故郷でしょ。存在自体のハイムケール（独Heimkehr）です。ハイムケール、これは世親の『浄土論』では屋とあるね。それから宅。その中に大会衆門、会という。広大会というように。こういうようなものは一般的に言えばハイムケールですよ。存在の郷里という意味を表す。それをもう少し先に句で表すね。二十九句とか一法句とかね。こういう二十九句の功德成就をもつて莊嚴されてある世界と言う。

功德成就というとは何かと言うと、勝ち取られたものですね。努力、行為を通して、行を通して我々の上に勝ち取られたもの、それが功德です。それが功德であり、見出したものは永遠に失うことはないのが成就です。見出したものは永遠に失うことはない。面白いことで、金を得るといふことはない。財産を得るといふようなことはないんだ。財産に対する執着を得る。金なんかあり得ん。金がもし得るものなら落とすことはない。そうでしょ。金を落とすたつていうことを言うはずはない。落とす得るものです、金は。そりゃ得られんわ。だけど金に対する愛着と

いうものは、これは落ちてくれれば結構ですが、なかなか落ちない。なくなっても落ちんわね。金はなくなっても金に対する愛着は落ちんでしょ。ああいう場合が得ると言う。成就すると言う。愛着を成就していると言う。あつても努力しなけりゃ見出せない。しかし一度見出されたものは失われない。失われないという意味で成就と言う。見出すという意味で功德ですね。功德成就ということをもって象徴されてある所の世界だ。本来、あるというのは実在ですけど、実在というものを莊嚴する。やっぱり実在というものを、人間の歴史を通して実在が莊嚴される。或いは莊嚴と言う場合に句という字で表してあるね。二十九句と。浄土と言つても句だつてことだ。

句と言えはこれは一つのフレーズになる。一法句とかね。さつき言った空というのは一つの一法句なんです。一切は空であるというのは一つの一法句であるね。こういうように、名とか句とかいうものは何をして成り立つとるかと言うと文ぶんによる。だから、今は我々は名として言つとるけど、句というものでも表されるわね。句というものを成り立たせるものは文です。文というのは文章、センテンス（英 sentence）という意味じゃなしに、アルファベット（英 alphabet）ね。アルファベットが文だ。だから音と音との結合でしょ。言葉と言つた時ね。声の屈折ですよ。声の屈折が言葉です。えらい殺風景な話ですが、そういうふうになります。だからして言葉として見出された言葉じゃなしに、語られる言葉においてこの発音ということが大事な所でしょうね。言葉というものもだからして、声の屈折としては、声は喉の摩擦で起こる現象でしょ。だからして一つの物質現象ですね。ただ物質でないようなものを表現するような物質現象ね。「あ」とか「い」とか言えは、何も意味が表されるのではない。「あ」も「い」もこれは音の摩擦が起こるんですけど、「あい」と言えは結合して「あい」という具合に、一つの名となるわけですね。「愛」とか「愛す」とか。言葉もそういう意味から言えは一つのもんです。だけどその言葉もものの中の一つであるけども、その言葉というものは不思議なものであつて、あらゆるものを表すものだ。言葉も一つのものであるけれども、あらゆるものを表すものであるね。だから講義でも申しましたように、人間は言葉を語る動物であると言う場合は、人間は

言葉だけ語るものじゃないと。思うものであると、行為するものであると、こういうように色々考えられますけど、しかし人間は言葉を語るということは諸々の能力として機能として、そういう機能ももっておると言うんじゃないに、人間においては根本的な意味をもつね。ただ色々な能力の中の一つの能力というようなものじゃないに、根本的な規定をもつ。人間でない存在も歩いたり食べたりしておるけど、言葉というものという所にですね、人間だけが衆生じゃないけど、人間という衆生というものが人間としてあるという、特有なあり方になる。言葉というものは人間にとってだから本質的なもの。単なる機能の一つじゃない。本質的な意味をもっているね。

三

そういうように言葉というものは、ものの一つであるけどあらゆるものをして、規定するようなものになる。一応言葉は色々なものを表す、伝達するものです。けれども言葉は、もう人間そのものと言ってもいいのです。人間を人間の根拠が目覚ますために、だから言葉を用いるんです。言葉が必要なんです。人間にとつての本質的な言葉であるがゆえに、言葉によって実在は人間に語ることができるとですね。言葉に依らなきゃ語るとはできません。実在の言葉っていうのはですね、今言ったように、言葉一般と違って、あるものを語る言葉じゃない。あるどれかのを語る言葉じゃないに、あらゆるものをしてあらゆるものたらしめておるものを語る。実在の言葉というのは、あるものを語るんじゃない。あるものでないもの、もの自身です。あるものを語るとは一つのものか知らんけど、そうかと言つてあるものを語る言葉じゃない。あらゆるものをしてものたらしめておるもの自身を語る言葉。そういう時に、一つの本願の言葉というような言葉がある。だから言つてもいいのは、一つのシンボル（Symbol）というような意味があるかも知らんね。象徴というようなね。何か象徴的な意味を担ってくる。あるものを語る言葉じゃない、どんなものでもないもの自身ですね。そういうものを表す言葉なんだ。だからこの言葉という

ものも、ものの一つであり、やっぱり開くという意味がある。思っておることを開くという意味がある。だから実在の言葉もやっぱり実在自身を開くために言葉は必要なんですよ。そうかと言ってその実在はあるものじゃない。あるものを開く言葉じゃないですね。何ものでもない、かえってあらゆるものをして成り立たしておるような実在を開示する言葉ですわね。こういうような所から、この前の講義の時は離言の言とか、一般的には声なき声と言いますか。名は一つの声ですけども、それは声のない声です。

龍樹菩薩の所に、『中論』の巻頭に「戲論寂滅」ということがあります。戲論というのが、言葉の世界をして破る言葉があると。これは、人間の分別というものから押さえたものを表す言葉じゃない、分別というものもつと深い底、分別を破った底、深みです。分別というものではたすくべからざる深みを表す言葉ですわね。深さにおいても深い。何ものでもないと言えばこれは深さを表すことになる。しかしそれがあらゆるものを成り立たせると言えば広さを表すね。どのものでもないという意味から言えば深さです。しかしそれが実は何ものでもない、それこそかえってあらゆるものをしてあらゆるものたらしめておる。これは広さです。ですからこの深さと広さ。甚深広大性ですね。甚深広大性というものを開いてくる言葉だ。それはイデオロギーというものを表す言葉じゃない。イデオロギーってこういうようなもの成り立つ地盤よりもつと深い所に根がある。イデオロギーの中においても、イデオロギーを否定するんでもないし肯定するんでもないね。否定したり肯定するのは同じ立場だから。イデオロギーとイデオロギーとは否定し肯定する関係だ。そういう否定もせんし肯定もせんね。否定とか肯定とかっていうのはやっぱり戲論でしょ。宗教の問題というものはそういうイデオロギーというように留まったら宗教にはならへん。だから龍樹菩薩では戲論と言ってあるけど、戲論ということをもつと具体的に、浄土教の善導はですね、異学異見別解別行と言っている。異と別と区別して、全く考えが違うのが異でしようし、同じ考えでも何か考えに相違あるのが別という。そういうように異学異見別解別行という。こういうことは何を表すかと言うと、やっぱり戲論というものをまた具体

的に表したものでないかと思えますね。異学異見別解別行に動かされないと。つまりイデオロギーに動かされないという意味になると思えますね。思想に動かされないという意味になる。

でも無思想じゃないんです。ある特定の思想でもない、それから無思想でもない。何と言っても動かされんぞと主張つとるんじゃないですよ。そんなのは動かされとる証拠です。だから、实在の真理というものを開示しておるような言葉、实在の真理を開くような思想というものが、動かん。戯論が寂滅するし、また戯論に動かされる。こういうことが成り立つんだ。それは論理的に正しい思想という意味じゃないね。論理的に正しい思想というのは非論理的な思想というものに動かされんと、こういう意味じゃない。論理というのも人間の一つの考えであり、非論理的というのも人間の考えですね。そういう論理よりもっと深い線というのが、そういう線を越えた所にいわゆる深みというものがあるわけですよ。それは甚深廣大、深さでもありまた広さでもある。無論、本当のことを言うと、深いとか広いということもないんですけどもね。浅いのに対して深いとこう言っておるわけでもないですけども、一つのいわゆる安立体ですわね。浅くもないし広い意味でもないという实在を深いと言う。より深いとか、最も深いとか、こういう言葉で表す。深いっていうことは、浅いままが深いんです。実はね。本当に深いというものはかえって、考えに先立って現れておるものだ。考えを超えとるような深さというものは、考え以前にそこに現れておる。だから実際は、深いとも広いとも言えんのですけども、そういう言えないものをやっぱり広いとか深いという言葉で表すわけです。言葉については、これは一番大事な点です。

四

もう一つその言葉という概念を明らかにするのにですね、その言葉に対して問題にするものに、名というような言葉がある。この名というものを、今度は名自身を一から考えて行くと、相ということがある。名という概念は何から

区別されるかと言えば、相から区別されて、しかし相と関係しておる。相を表すものが名で、相を開示するものが名である。だから名の問題というものを、もつとこの名自身の内から明らかにしようとするれば相という言葉ですね。相というものは、光というものによって表されるのがものの相です。光というものが無い時に相は終わる。相は光の中に表れる。これは何て言ったらいいか、フォーム (英 form) だね。フォームと言ったらいいんでしょうか。名前は言葉によって出ておる。相というものはこれは光の中に現れてくるもの。こういう関係が出てくるんですね。名は相を超えたもの。そういうものを法則と言っておる。深くまた一層広いというようなものが実在という。実在が人間というものの上に喚びかけて、人間の上にこの法性というものを開くはたらきである。それが方便である。さっき言ったゼツチェン (setzen)。安立するという。安立、これはセツト (set)、置くという意味ね。置く・設ける。立てるということ。立てるということはそこへ置くという意味ですね。安立施設。こういう概念がすぐ結びつくのが方便。安立施設、施設方便。方便という意味が出てくる。

方便という言葉もね、どうも誤解が多くてですね、言葉が汚れてくるんですね。長い間、歴史の中に言葉が流転してくるんです。だから流転した言葉で考えるでしょ。また考えも流転してくる。だから言葉という、我々の考えを正しくするためには言葉を厳密に聞くということが大事でしょうね。方便というような言葉も非常に間違つてきておる。方便ということがかえって誤解を招く。相が方便であつたとするならば、法性は真実であると。法性が名と相もつて自己を開示する。自己が自己として成就する一つの方便だと。真実が真実自身を成就する所の方便、真実が真実自身を成就する所の方法。一つの身と言いますか。そういうものが方便だ。無論そういう意味で言うところの方便は虚偽に属するものじゃない。「嘘も方便」だつてこと言うけど、嘘は方便じゃない。方便というものはやっぱり真実のはたらき。虚偽に属するもんじゃない、虚偽を真実にするはたらきが方便です。別に虚偽のものじゃない。しかしそういう意味で方便ですけど、方便がやっぱり軽く見られるのは、一つの手段というような意味があるからですね。手段であ

ると。こういうような意味も含んでいる。何か目的を達する手段であると。目的は重いものだけ手段は軽いものである。ある目的のためには手段を選ばんということも言えますね。選ばんことができるような軽いものだ。目的を変えることはできない。目的を変えるのは止めてしまうことや。そういうように、手段というような意味がある。ちよど前にも、言葉というものは何かと。言葉の本質は何かって言うとは有用だと。そういう場合はやっぱりこの手段というのですかね。つまり道具だ。言葉は伝達の道具であると。自己を他に伝達する所の道具である。そういう一つの手段であると。了解の、知るとのことの一つの目的を達する。知るとか知らしめるとかということの道を用意する所の一つの手続き、手段であると。こういうようにさっき言ったように、方便ということが一応は手段というような意味をもつ。言葉が方便だって言う場合には、言葉は一つの道具であると。こういうような意味が確かにあるだろうと思いますね。それでこの方便という言葉が何か墮落してきたというのは、そういう墮落し得る要素をもっておるからです。

今この實在の言葉というものは、何かを表す言葉じゃない。何かではないもの、かえってそれが何かをして何かたらしめておるような實在を表す言葉です。それがこの前言ったように、普通言葉というものは有目的に考えられておるから、手段や道具というようなものを超えた意味です。目的と手段という、目的に対する手段・意味じゃない。むしろ目的を包んでおるような手段ですね。手段であると、手段の向こうに目的がある。そうじゃなしに、手段の中に目的を包んでおる。目的を包んだ手段だという意味から言えば、他のためにあるんじゃない。自足性と言うね。言葉というものは自足性、自己成就である。實在が實在自身を成就する。そういうことを僕は思う。こういう言葉はちよと世間に通用せんかも知らんけどね。ちよと言葉がないんですが、自足性という。一応そういうように言っておきます。言おうとする意味ははっきりしますけど、自足性という言葉はあまり使わんから。それほど言葉は有用性に覆われてしまっている。宗教の言葉というものはなかなか表せないけど、芸術というようなものを考えてみるとよく

分かるね。言葉というものを一つの方法とした芸術はいわゆる文学ですわね。文学は散文文学だけじゃない、やつぱり詩というようなものもありますしね。詩という点から言えば、それは文学と言うけどムジーク（独 Musik）、音楽と結び付く。そういう意味もある。光の相というような点から言うと、これは造形性の美術、彫刻とか絵画とか、そういうものに関係してみても分かることです。例えてみたら言葉というものは芸術の場合は、ただ手段というもんじやないわね。散文文学の場合はそういうこと言えるにしても、詩というものになるとディッチヒトゥング（独 Dichtung）というような場合、単なる手段じゃないね。だから絵画というようなものでも、分かんけども線とかは、空間というものを区別するという意味で線がある。ある空間と空間との区別。こういうようなもの。空間は色で表す。まあ色と線しかないけど。絵画でない線、絵画でない色、そういうことも言えるけども、絵画のもっているような線というものは、ただものともを区別する線というもんじやないんですよ。これは僕よりもあなたの方がよく知っているでしょうけど。何にも線のない空間というものに線をサツと引くとね、それは空間が開示された。無限に空間というものは形を取ることができ。そうでしょ。この空間の中に、こういう線も引かれた、こういう線も引かれた。こういうふう無限に広い空間に、こういう線を描いた場合、線でない空間というものがよく表されるでしょ。空間というものはどういものでもないが故に、どういものにもなるね。空間というものが表現されていますよ。だから空間を成就していくわけですわ。それは部屋というものは便利だという話じやないんですよ。どんな部屋におつてもいいつもんじゃないんですよ。何か芸術性というものをもつてくると、ただ便利だとか教室で講義する所とかそういう目的を達する部屋というようなことじやない。そんなことを言ったら歩いている人間が入れたらいいと。こういうもんじやない。そういう部屋はつきりおるとそういう人間になってしまう。この部屋自身に入ると、もうそこに部屋自身が我々において内観の道に展開してくる。そういう部屋です。

資本主義の世界というのは、部屋でも茶碗でも道具になる。みな便利に飲める。便利にコーヒーができる。こうい

うものでしょう。しかし、それだけじゃない。飲むのに便利だと、安く買えて何ほでも買えるというような、こういうのは資本主義世界における商品でしょう。ところが芸術的にはそうじゃない。飲むのに便利なんじゃない、茶碗が「どうぞ一杯」ってこう勧める。茶碗自身が我々に飲む要求を起こしてくるわけです。ただ飲むのに便利じゃなしに、旨く飲ませる。旨く飲ませる茶碗ね。そういうものは資本主義の商品として出てこない。旨く飲ませる茶碗だ。飲むのに便利なんじゃない。部屋でもみんなそういうもんです。そういう線というもので空間の絵や色彩というものに現れてくる。こういうことですよ。だから、芸術家が線を引く場合に、つい引いたつてもんじゃないです。科学的に研究して尺で計って引いたんじゃない。そうじゃない、無限に引けるんですね。無限に引ける線の中からもう最後の線を選び出した。だからデッサン見たらよく分かるね。色んな線を引いてますよ。で、引いた線の中から、もう最後にはこれ以上でもないしこれ以下でもない。こういう線を選んでおるわけでしょう。そこに初めて、線のないう空間というものが線によって具体化されてくるね。ものがものを表す、ものを区別する線じゃないんだ。いかなるものでもない実在を具体化する線です。だから絵というものはリングを描くもんでもない、家を描くもんじゃない。絵は絵自身を描くんです。それは今日抽象絵画というものが出るのはそれだ。何かを描いたんならそれは文学の代用品でしょ。何かを描いとるなら、写真が一番いいわけです。そうでなしに、何かを描くんじゃない。絵は何かを表す手段じゃないんですね。色というものは色自身を表現してくる。線は線自身を表現しておる。無限の線がある。無限の色がある。それを深さと言うんです。甚深広大性。こういうようなものは、絵画の場合でよく分かるね。それから芸術の場合、文学の場合を考えてみられたらよく分かる。これは単なる道具というようなものじゃないでしょ。それは道具じゃない。かえってこれは自己が自己を成就する。何かのためにあるんじゃない。それ自身のためにある。ものがもの自身を成就するという意味をもった、そういうものこそ言葉の本質だ。それを自足性と言う。概念で言うわけです。分かるでしょう。自足って言葉はないけど、僕がつくった言葉だけ意味は分かるでしょ。

五

言葉というものは自足性。自足性というような意味を含んだ方便でないと駄目ですね。単なる道具性っていうような意味の方便を考えるから、方便は何か軽いものだとする。自足性という意味の方便ですね。だから、方便そのものが真実なんですよ。真実から方便を開くという意味においては、開くための方便だと。開くための一つの方法だと、手段だと、こうも言える。しかしそうでなくて、その言葉を手段として開かれたら、その言葉にこそかえって言葉を越えたもの自身が成就しておる。だからね、実在はどこまでも言葉を越えたものだけど、それが言葉ということによってですね、言葉こそ実在だと。言葉こそ言葉でないもの自体なんです。譬えてみたら、画家が絵を作った場合ね、芸術家が作品を作った場合、その作品というものは芸術家を作ったけど、芸術家を作ったもんだということを越える。そうでしょ。かえって芸術家を作るんです。芸術家によって作られたものじゃない、かえって芸術家を作るもの。芸術家というものがそれによって成就するのです。作品というものはそういうものです。かえって作った人間をいつまでも出られないのは、それは作品がまだ立派な作品じゃないからです。かえって、自分の作った作品によって作った作者自身は作者という偶然性を越えて行くんですね。作品となった場合は作者を超えて、作者という人間を超えて、あらゆる人間のものになる。作品がまだ完成してない場合は作者の範囲を出ない。だから作品というものは作者から生まれて作者から独立して、作者だけのものじゃない。人類のものになってしまふのですね。こういうような意味で言葉というものは、言葉で言い表されたものこそ、表そうとしたもの自身だと。表されたものこそかえって表そうとしたもの自身だと。言えないものが言えないものとして成就しておるんです。それが言えたことなんです。自己によって自己が言い表された、その言い表されたものこそ、かえって言い表そうとしていた自己そのものだ。それはもう方便というもんじゃない、かえって目的自身と言える。ものがそういうように成就するんです。こういうことが言葉と

いうものです。言葉の規則性ということを考えなければいけない。

その言葉というものは、もう一つ考えると、そこにやっぱり相ということがあるんですよ。言葉は何かを表す。言葉が表そうとしておるもの。言葉によって、もの自身の相が開かれる。光の中にまた溢れるわけです。覆われておったものがね。實在の言葉によって人間はそこに目覚めます。目覚ますと言うと實在はなかったんじゃないんだとなる。目覚まされた人間自身の中にあつた、埋もれていた實在が光の中に現れてくる。言葉によって。名ということをもう一度名自身の内から考えてみると、相ということがある。名は言葉に属する。相は光に属する。言葉によって、名言によつて實在は光の中に自己を表す。自己自身を表す。これは方便と言うけど、相ですね。相は体ということがあるから、体相という。ただ相は形式じゃないんですね。フォームという言葉の中には、さつき言ったように、文学、それから絵の線とか色とかというものは、そういうものはただ何かを表す形式じゃない。フォームだけど、そのフォームは内容のない形式というものじゃない。内容を包んでおる形式ですね。例えてみたら、音楽というようなのは、音と音とが結合するということのように、加音と言うでしょう。聞く人はこれは宗教的な響きだとか、これは嬉しい時だとか、結婚式だとか、葬式の歌だとか言うけども、そういうことは音楽にありやせんでしょう。あんなもん習慣じゃないかと思いませんか。何か台湾に行くとかね、結婚式の時木魚を叩いておる人がいる。日本人は木魚が鳴ると寺院という感じを受けるんですけども、台湾に行けば結婚式だ。その時に、宗教的な歌とか何々のだとか、そういうものはかなり主観的なもんだね。音楽は、ああいう声と声との。音楽の学問というものは知らんけど。全く殺風景と言えば殺風景なんだけど、決してロマンティストなもんじゃないわね。非常にもう数学的なもんですわ、音楽の理論というのは。それが色んな人間に悲しみや喜びを与える。それは人間が勝手に受け取るんですけど。ああいう場合に音楽というものは何か悲しいという内容を表そうとする形式じゃないね。もうそれ自身が内容なんだ。何かという内容を表す形式じゃない。むしろこの形式自身が内容を生産しておる。そういう場合はフォーム(独 Form)という。広い言葉

でフォームという意味じゃないか。仏教では体相。内容の点に重きを置けば体ですけど、別に相の他に体がない。かたちというようなこともあると思いますね。仏教でも法というようなね。諸法。法はものじゃない、かたち。諸法はただ死のみありとか、諸法はこうであると。事物じゃない。事物を法と言わない。事物をして事物たらしむ形が法なんだ。諸法は無我である。これはまあフォームという字を使った方がいいんじゃないかと思いますね。実在は実在自身、その形式が実在自身なんだ。実在の形式が実在自身なんだ。だから、言葉によつて実在は実在自身を光の中に表してくるね。こういうことが関係してくる。今日はそこまでにしておきましょう。

（本稿は、一九六三年十一月十六日の大谷大学における講義「願生論」を筆録整理したものである。文責編集部）